

参った三題（ハバロフスク・二〇〇四年二月） 宮崎 久

一 湿度

ホテルのガチガチに凍った窓から見えるのは、あの大河アムール川。ロシア極東に来たことを実感する。対岸まで一キロ以上はあるだろうか。その大河に氷が張っている。

一方、窓ガラスの内側は暖房で乾燥しきった空気に満たされ、鼻も口もすぐカラカラになってしまう。夜寝る前に、乾燥防止のため、バスタブに御湯をいっぱい張っておく、バスタオルを濡らして掛けておく等々の対策を講じてみたが、焼け石に水。

一日二日の宿泊であれば特に問題はないのだろうが、二週間の滞在だったので、全身の皮膚はカサカサになり、特に手足の痒いのには参った。

ベッドにもぐりこみ、身体が温まってくると、もうたまらない。全く眠れないのだ。かの有名な大塚製薬の皮膚病全般に効くというオロナイン軟膏を持参していたので、手足に塗ってみたが、全く効果なし。

たぶん、湿度を計ったら、針は0%を通り越し百三十%くらいに達していたのではないだろうか。（現在、老人性皮膚そう痒症で通院中）

二 温度

戸外に出ると、足が冷たいのなんのって、半端ない。それもそのはずで、日中、活動する時間帯でも、最高気温がマイナス十五度前後、寒い日にはマイナス二十度を下回っている。ちなみに、最低気温はマイナス三十度を下回る。

車に乗ったら、暖房の吹き出してくる助手席に座り、温風で足を温めようとするが、なかなか温まらない。靴下を二枚重ねしてみたかどうか

と考え実行してみたが効果ゼロ。参った。

滞在中、「足が冷たい、足が冷たい」を連発していたところ、帰国間際になって、現地の通訳が、「靴を見せてほしい」というので、私の靴を見せてみたところ、この靴はハバロフスクでは秋に履く靴だという。

そういわれてから、彼の履いている靴を見てみると、身長割にはかなり大きいのだ。何と彼の靴の内側には毛皮が貼ってあるのだ。こんな靴じゃなきや、ハバロフスクの冬は越せないわね。

三 トイレ

買い物に出かけた際、小用を足したくなったが、そのデパートの中にはトイレはないという。近くに有料トイレがあるというので、急いで行ってみた。料金は一人五ルーブル、入口でおばさんに支払う。

料金を取るからには、さぞ清潔で快適なのだろうと思っただけで、現実とはまったく逆で、不潔、悪臭プンプン。これには参った。金返せと叫びたかったが、料金は連れが払ってくれていたもので、叫ぶのはやめた。

（了）

